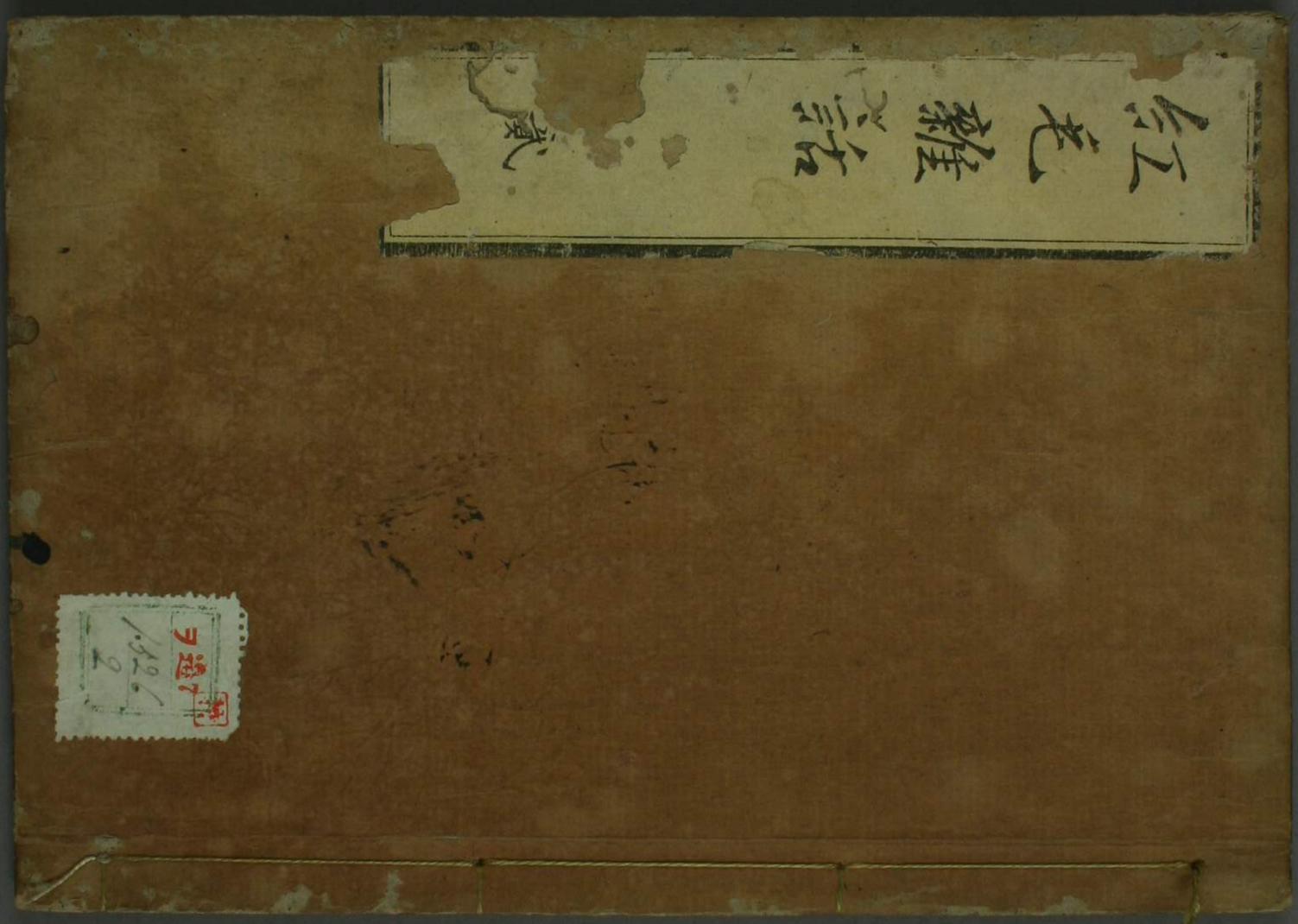
KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Centimetres
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



蘭山文庫
京都帝国大学図書

紅毛雜話卷之二

東都　森嶋中良　編輯

○鳳凰の説

中川淳庵の考に曰。雲南の雄鶏の雌を「ウーン」雄を「ハーン」とよぶ。鳳凰のこゑ漢人の音訳なり。「ヨレストレス」書名に印帝亜の称として図せり。和漢の畫に鳳凰の風王化に服して方物を献ずるごとくなり。唐土の聖代に来儀せしいつもの出でそ

門 126
編 2
表

なり。真全芳菁ハ龍脳ハ茶菜選に委し。他日州行の時に詳なし。

○弗尼思

「フーニス」ハ鳥の名。唄人の製に星宿より火を出し仮て此鳥四五百歳ありて死して其後に生る日に知り。香木を積て巣をなすなり。天気を受て熱を含ぶ。日に待て尾を振て火を起す。自ら火中に焚死す。其灰変して一ツの虫となり。その虫化して鳥となる。故に天下に唯一ツのみ。西洋の諸ふ。故にきりの国「フーニス」と名ふ。ポルトガルの国。「ヨンストンス」其国の産出書にも有り。実ハ寓言のよし也。

○都児格の都

都児格の都ハ「コンスタンシノポル」と名ふ。三角の地にて別に「イタリヤ」国の名の星数にして十五星あり。

○花沈

此邦にて云。沈香の花龍沈ハ「ポルトガル」国の名の食物なり。其製方の如し。ひとつづゝ彼国の語のよし。

糠米粉　各七合

右ともにて煉合せ。中で上て沈香ふ去るなり。

○天鵞絨

びろうどゆらりハ「マレイス」王名の居なり。紅毛あてハ「アルヌール」といふしく以上の四説ハ全沢るの説なり。

○靈鷲山附 釈迦如来の傳

印帝亜國ハ錫蘭といふ海あり。印帝亜ハ改ハ天竺なり。島の中央ハ「アダムス」といふる山ありて高さ凡二十里仏教ハ所謂是釈迦山なるべし。禁ハ巔まで十二層の山道ハ攀躋迂路なるべし。嶮岨なる有り。鎖ハ設けて取附たり。ゆらり山の者の労ハ卵ハ頂ハ添あり。其ハ別まて山中ハ周り。山下に流合て一の河となる。是を「シテガンケン」といふ。三月初旬より山へ登ハ

登ず。ゆらり山の行者ハ河の水ハ浸り。法の恵事ハ懺悔して垢離ハ河ハ。山上へ登るなり。山口より長き石ハ横ハ切りしゆらり。自然石ハ柱ハ。其上ハ仏祖の造りしなる物なり。抵雪精舎の鐘なるべしと云ふ。其ハ高さ凡六尺なる江木ハ約華の引綱を下ハ引ゆらり山の者信心ハ堅して十指ハ指ハ。罪障消滅せざる者ハ絶て音ハ発せざるなり。附ハ山上へのぼりゆらりて夜より下山。他日改て登山なるべし。扨幸うして巔ハ

えまでばかり一平の平地あり。其河号て「ハこるル
レレリパーテ」といふ。たの方より一の小厳河流る。是也
山の河者。憩息の所なり。右の方に以前ハ荘厳華
麗の堂有しと云へとハ。其中央より池あり。空
ールレマルアカントン」といふ。八功徳池なり。俗よりこれを
「タルポクラ」といふ。沢山てる池と云なり。姪方
ちぐら婦人けあり河脇まれば。懐胎まるといふ
伝てなり。是まても凡俗の者猥に汲ること不可なるべ。
俗河の人よりて。けるこれ河はるるるる。此池の
辺に大石あり。石の面に仏の足跡あり。号て

「シリパテ」といふ。是釈迦の足跡なりて吉邦薬師ち凡人の足
より甚大なりて。足形のあざやかなる事。あるいハ
蛭よ印河押しるがゆへ。此山のりあるを羅漢
して恭敬礼拝せり。此山小なれ共ハ天竺国中の
人のうやまひ。巴尔斉亜国。支那。唐土共に遠
の他国より参詣て。毎仏生世のるが仏道修行
乃者よりあるよ。件石東印度亜ヨ一王あり。
后懐胎の月よ。是清河造しむ。是清ハ沃洛の製
しなる日太子降誕て。王悦て日ける神聖
あるべしと。宗して出ずるよりて神彩

顔悟して。母子ともに隨て。無知愚癡にして。
幼少なりし。俗と厭ふ心あり。父よりて室中
より一の室に據く。人世万事の有様に目を閉じて。
籠り居ること数年。十八歳の年。室中に巡遊
せんことを請。王曰。汝しいて数年の後に遊
しめて遊観せしむ。太子始て道の傍辺に
見る所の人。衰老して。白髮にして。背曲
がりて。杖に縋りてよろぼひ行くを。問て曰。彼は何ぞ
やと。又問て曰。彼は何ぞ白髮にして。
や。従者答へて曰。是は人の天質なり。
杖に縋りてよろぼひ行くは。又一人の老翁

出世の心やあり。従者答へて。人の年老ては筋骨枯れて
皆かくなるなり。行く末人は幕に入て一念
発起して。たゞちに幕世と厭離して浄土に
帰依し。ひたすらの後。東印度に出て中天竺に
入り。摩訶陀国に至る。摩訶陀山
に入て法に法を求めるものあり
しず。弟子去年洛陽北邙賊法源寺の什宝物所元伝が画くる釈迦
如来三世仏菩薩の絵伝紀と云て釈迦一代の家のくらしを
小流に伝へ大小図ど　よりて法太子他国へ法に伝へんと

靈鷲山之圖

絶頂之圖

江漢勇峻圖

靈鷲山

靈鷲山全圖

欲して。僧すなわち等身の高の面を。他国に紀さげ[illegible]
ぶ。其名号を唱へる。数百。其名号を通ず
れば。石面より形ばかりて天へ上る。又の王
仏くして高くよりぶ。ぜんてものゝ多ぐさりよ。
彼太子の像を造りむ。其仏像の始めり。其まる
等太子の法別。法説。雑説よりまで。委く集成
して若干の書より作り。教諭をなる者をて。
其る作を送て忘せざ[illegible]ん。多くを[illegible]
唄りむ。書別仏経ちる。（夢に仏経僧侶の中に梵唄しらふ
おありて委く成ばかりなる
おの送れば作く其太子の名ばかり「サゴモンバルカノ」とる西洋

の「ピユートン」[illegible]人の法ふ出家博度の法の名ばかり「ダ
ラマラヤ」[illegible]。枝仏是石のる。紅毛の「アポ
ステルトーマス」が法ふ。是金く雁相かりて。湯茶の石
工が作る。相ちり。「アダムス」山中の事ま陪て
行くの雑説あり。皆仏法とる伝する沙者ども。
附会の妄説なり。[illegible]。僧ハ法湯の西に来る人。
花蓮的印[illegible]。地漿の古中より[illegible]流の荒場ばかり
法[illegible]。席上ま[illegible]。
法[illegible]。

○生別死別

彼邦のをゝ〳〵めて。生別死別を悲み歎かるゝを。
見るに堪ずよりてハ。呂宋みるゝ〳〵て別を惜む。無〻
の涙きるゝ者のゝ。ゝれを偽りとゝるゝ。死別ハ
心中の悲みもきゝ。面ゝ憂ひの色を出さゞるし
死ハ天命のなす所にして。強くハ天〳〵の忘れるゝとゝ
んるゝ〳〵なり。

○紅毛人葬式

往年「ヒールコープ」とゝる加毘丹丸哇より日本へ渡海の
洋中にて病死ゝる死骸を。長崎稲佐山の悟真寺へ
見ハ紅毛人を葬ゝ
葬ゝ送ゝ。始末を。玄仁あの物語にて

聞ゝ〳〵。先屍の腹を割て臓腑と引出ゝ〳〵。浩ゝて
其切り口を縫合セ。其屍と〳〵て板ぎれ〳〵ゝ。もくて彼邦にて
ゝき板を穿て外板を収め。是き板ハ彼国の喪服
ゝ下ゝ〳〵ゝ載ゝ。種〻の浩ゝて
ゝと浩。其柩の上を瀝青にて塗固ゝて。船中ゝ安措ゝ
海の上を日数を歴て後。長崎へ着岸の上。葬礼を行ひゝる
時の式ハ。棺へ天鵞絨の覆を。棒ハ堅ゝ二本横ゝ二本
入て。かつぐゝゝ。悟真寺まで送りの
蛮人数多。各ゝき喪服を着。ゝ。ゝ二年の裁て。
ゝ。ゝ。ゝ。右の貢へ。ゝ。ゝ。ゝ。
着ゝ。葬穴を深く堀て。柩を埋ゝ。ゝ。ゝ。

てかゝる事なり。（中人の葬式も大抵けあるむき のゝしくかゝるよりあり）石碑ハ横石なり。
横文字をかきて路を刻む。石面の一旁に砂時斗の面方に
その横なるもの翼ハ長く紋ハ彫付たり。是ハ我邦の判事
なの横なるものなり。砂時斗ハ機関の砂の落切るハ
なり。ぜ吸の絵しるしにたゝへ。左右の翼ハ人死
ても。名ハ千万里の外に飛ぶよ花といふ意なるよしなりとぞ
彼岸の人警諭ハ面白きものなり。大抵ひ数の画組なり。
林子平ゞ加毘丹の葬式も。玄沢子の話と同じ。
輿舁の日庸二十人に。ハ紫陀人の印の付たる者板ハ
箱七ツ。棺をひよん送りの蛮人。西洋棺の内に

猶仇の湊まで。十八丁の海上を舟にて。棺ハ舟にのせ
し兄孫の加毘旦の弟ハ布文の羅ハ立たり。拙悟真寺
の住僧ハ枝ハ舟にて。住僧おのゝ浦恵寺の僧
徒のらずして。遺骸を丈より沿の孔雀ハ出べて寺
の例よまるゝ事なり。所笑ハ和尚の引導なり。
紅毛の死人の耳ハ何と迄入るや。面白くてをつ
りかねべし。

○紅毛喪服

喪服のゝハ「ラアウケレイド」とゝ黒繻子ハ仕て製す。
仕立常の服よかゝるぞなり。拙て喪の式ハ。遠色ハ

用ひ。喪ある人のもとへ黒き布に「ラアウワー」とかく。書翰の封とぢ目に赤き色の「ろか」にて。指にて製しかける相印。穴あけて濃しをそのうへ印を押まく。喪中の文通あれば黒き「ろか」相用ひ。忌服の日取は詳なるすと。云

孝恭院殿御逝去の節。参向の加比丹「アウレンド」并ルヒンヘイ上長崎屋の旅亭にあつて。作出されし黒色の喪服を着し。身祢に傍に加へず。御初七日迄濃み形にて七日の日に日本の風にあらざるべしと。彼国七日にて日を配れば。七日にて一周なるべ

由なるべし。國獨法服まうされ候。

○黒坊の葬式

林子平清陽尹に遊車にて。西洋鈸に出入せられし。天竺人の葬送に入る。（清陽尹の黒坊ども）棺は松板にて拵へる。外板なり。色も出来なり。梅作山にあつて送る。国中の黒坊悔まちまで送る。想て寺僧のよ河待ず。葬完の後めて死骸河に出し。清深みてにの国に出河なるべし押通。

棺きほよ伏せもなき。其外は「サロン」といふ大衣のやうに仕立なる木綿の羽なる礼服河着し。（彼邦の服なり）其外安河着て礼服河なし。模文なるみて生なる経文河出

して（天竺にて今世八梵字の字母なるべしとの説あり「コレイス」の説なり）後経典を。さとりて後堂に合せ「アミン」
殊勝なり。まことに通俗にして「アイイーハ」「ナイイーハ」と唱へるなり十遍「アイイーハ」「ナイイーハ」と唱へ
ては屍を百遍みして。屍に埋るなり。ゆゑに人の考
み同。土に口へ含ませ（ちげんぎあり）四元行と号て火を。
信ずる者とぶらを屍に火を。生和水にそ
とバ火葬し。火にそる信ずる者
枝みを。土に尊信ずる者とぶ。縄をもつて樹の
水葬火葬土葬林葬也。火葬の四元行は天竺の四葬此文とお似ずるなり長崎に居る西洋人の内に火氣の

三に信ずる者に。やはり日本の制みるゆゑにて。
て土葬ありしとぶ。中にも乎がえる和の。
土に押へ含ませ。土にそる信ずる者に葬る武み
てやありけん「アミン」と唱へ阿弥陀とつとめること。
去春参る西の蛮人「グウンラアドヨーナス」と云筆者のいひ
けるとなり「アイイーハ」「ナイイーハ」の事考へ。又
去沢みにやとなる墓坊の墓碑にいとなるびとり。屍
に。ありてとなる。沐浴せ。其上に布帛みて寒。
棺に収て葬るなり。（中良堂みに上みるる四元行の内のみにそる信ずる者なるべんも葬のみてかくハとなる）
べし。文より塩みを。お屍に供じ。屍にそて左右の指の

の法なり。中良案ずるに紅毛家にて書物を額に押すに毎
朱墨遠華の印像あり

三徑文は通じ徑て。「トワンアフ」と云て赤土の
文は迷ふ事なく淳びめくことなり。「トワン」
は紫敵なり。「アフ」は鬼神のなるべしとなり。「アフ」
の事いさゝか思考わるし下に載せり。

○海黄　花布の名

海黄の色は紅毛にて「アルモゼイン」とも榜曷剌国より
出る織物なり。かいきは榜曷剌の沿なるや。亀土の書には
茂機と載せたれども詳ならず。皿紋は南應帝
亜の地。「スラタ」とも国より出るとなり。紅毛にては

「セッツ」とも云さゝさらとも「スラタ」の転語なるべしと
伝聞の説なり。

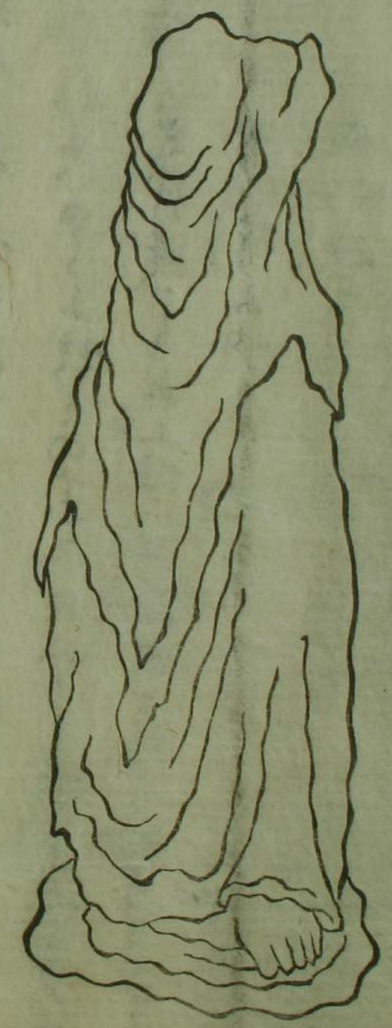
○木乃伊

亜弗利加洲の内ヨルバリサとも国より「子ーゴロス」とも
沙金は多く産する国へ利欲にやける者。命を捨て
遠南に行路の日数は計るべき九六箇月あり。其
内廣原の沙地は行ること二箇月なり。此地突熱の
人屋水泉なく。道路の支とする擄べきを著しもの。
実に天下第一の艱難なり。此間は往来の商客。堂と
かゝるに二三百人ばかり行るるの糧米の婚の数

其外要用の雑具等所。要くを備て舵を負ひ。
昼夜日輪の出没所見て方位と知り。東西星辰の運行に依
て方角所定めつ。そこそこ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵中くるり。
此沙地所往者の大海忌〳〵東西の流るゝ所流隙
海狗〳〵れば。熱砂虚空海満ち行人迷ふ
ものの。忽遠方迷ひ。進退度所失ふ時海面熱砂
きらきらに面とろ。砂石眼耳入充て。ぐらぐらとうみ死
海ものの多し。其屍熱砂の中埋れ。骨肉燥焦て
あるゝ不灼過炭のわし。又時ありて大風起り吹埋
〳〵砂石吹ちらせば。彼屍砂上小暴ほ。行人たゞ
此屍年月所歴れば上等の茶しるゝ。を別木乃伊ゝり。
去にして土人等。早移と拘換りて。人も同まぬ古墳を

見所にして甚〳〵市〳〵ぴ拘則木乃伊ゝりと。彼邦の風流
海面。阪入多國の内。「アレキサンデリヤ」〳〵所ゝり。此地
豊饒ゝて人民殊ゝ孝ゝり。人死れば其腸所
抜去て。うゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵

木乃伊全形之圖



あらき。板にうづきて其屍に得。交易して雖價に得と雲傳あれ。ハ「モミイ」といふ。唐土にて木乃伊と出ハ誤なり。ミイラといふハ日本の俗云なり。前年又く長崎

加毘旦「ロンベルゲ」が。花布にて書籍の内に「モミイ」の全形に画いて。摸写して右に出す。枝田玄白ハ頭顱骨を義とす。弔ふ家にハ脊と臍骨とを藏す。其形いとうる欠損せざ。而して布目あるハ。彼アとまひとる布の故なり。

○俠泡弶

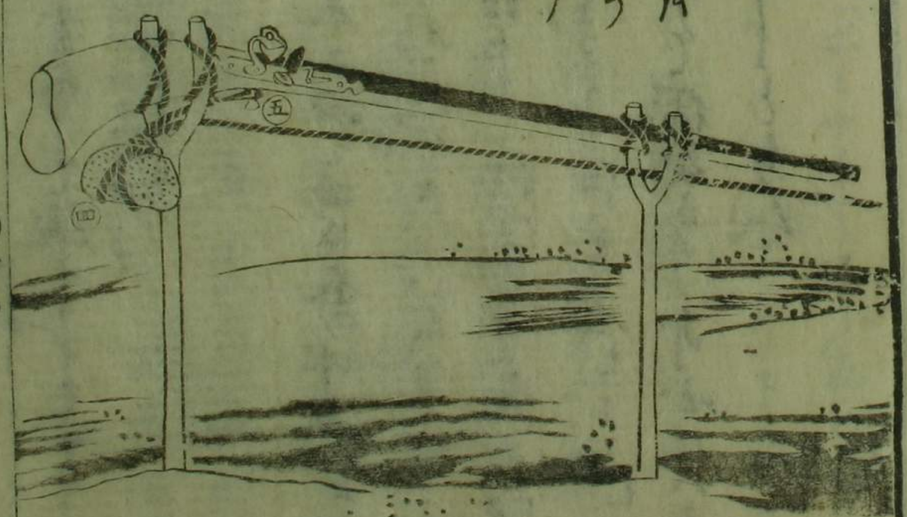
唐に写真画ハ。沢官橋林堂に聞が「デッチンギ」名より画づり。又ハ「ヨメール」と書に載る不なり。狐狸のたぐひの畫り形る。穴の口仕を又ハ孔あるを踏筋の林のうみ〳〵とる器にも出もり。此書金

鉄鉋弥之圖

㊀ 山板へ足汁端をそる
㊁ 横木ちをちる
㊂ 栓ちんをぬく
㊃ 錘の石をりる
㊄ 引金むける

紅毛の鳥銃ハ火縄ハ用ひず火燧にそうちつくるゆゑあ作りとのあり

中良写



部七巻あり。実に支りの大奇書なりと云ふべし。
栖林九卓弦[illegible]が家兄の紅毛[illegible]のやうに感じて
[illegible]に出府[illegible]中に只一部の書なり

○切腹の事

「キユーレル」[illegible]る人。西洞素[illegible]曰。日本の刑法[illegible]人罪[illegible]犯[illegible]る時死[illegible]揚[illegible]ば人の[illegible]ず[illegible]して。自七首[illegible]て後[illegible]切[illegible]代[illegible]り。[illegible]否やし。何素[illegible]の[illegible]る[illegible]。[illegible]「キユーレル」言[illegible]して曰。日本の人。氣[illegible]まで猛烈[illegible]。[illegible]にハ[illegible]も[illegible]ぐ[illegible]ると云[illegible]。

○ポーチーの病症

玄沢[illegible]。近来彼国の人「ポーチイ」と[illegible]病[illegible]。
[illegible]百年以来の流行病[illegible]。猝[illegible]下痛[illegible]
腫[illegible]。[illegible]の[illegible]。[illegible]衛[illegible]して死に[illegible]。
此症暖衣美食して。身の運動[illegible]き人あ[illegible]
[illegible]。出[illegible]遠留[illegible]人の内。船頭加[illegible]且[illegible]
[illegible]ハ養生[illegible]。船働の「ニタロス」の事[illegible]下人[illegible]ハ絶て此病
[illegible]。[illegible]方に[illegible]御氣衛[illegible]の症[illegible]。今年
[illegible]「ロンベルゲ」。長崎屋に滞留の内[illegible]病に[illegible]。
一[illegible]人事[illegible]。[illegible]。[illegible]語[illegible]。鈍刀[illegible]て。
脚底[illegible]。[illegible]の痛[illegible]。

○男色の制禁

彼邦男色所禁ふずる事嚴密なり。色人邪ふをむく所以なり。當時ある所把ことのあり。其把ちく人火刑にかりれ。把されるる少年ハ海へ沈められるなり。今も然るよし。今年の筆者「リカルド」ぞ云しるく

○アンペラ

玄澤子曰。アンペラハ俗唐の俗なるやさぶらなり。唐山にて似るといふ蟲坊ハ「テカル」レイナ」とふ。「テカル」ハ算崩しの組るるものなり。

○魚哇の風土

魚哇ハ日本の九州ともいふ。又咬咄吧と称するハ。汐紅色人ハ歩行来りしる所土人ハ向ひて。爰何といふぞと問ける。云語毎ぞる土人等其ハ。ある生産りしる椰子の樹のもを同事よりさ行ける。「カラパア」と言へ。蛮人ハ蟲の名ハ云ける。ことを聞ひて。ゆゑて「カラパア」と唱へ。俗しるり。実より後。ひ物とをにへる上あてしるれバ。名ハ「ジヤロ」又「ジヤカッタラ」とふ。夜間ハ改られ。実の蟲名ハ。平清にハ名遠少て云ありしる「カラパア」しる唱ることを。「カラパア」とハ椰子の事なり。ハ州とぞ。もくべて走

うしうしゐに多くの木あり。瓜哇ハ國中み山なり。年中温暖の地なり。平日小雨ときどきありて晴ゝていと出ものなり。おもく人の居住する所ハ郭ゆ構えて周囲み唐山「イギリス」應帝亜。そのほかの人の旅宿所ゆ。世界第一の大港みして蕃船ときどき商船ハ出入とい。ア。悪熱出るゆえ。土人の正坊ども。ハ大抵深鞋みて居るゆえ。ゆのみ辻切多し。光ハ悪奴の性質み負ふる者。街み出て勇徑ゆなすが有り。蛮人きびしくて。ゆ小ゆ者。環み家のみを焼て。今ハも粥みゆゆ焚てゆしゆ。咨ひ。粥々に代地のみゆ振し刻

しゆゆ。庫ゆ人ハ代理ゆ解ちて。箱岸ちやいゆ。椰子

阪合する少日みゆゆて病ゆ發し。死みいこゆ

ゆの多しゆゆ。ゆ清へ来る所の蛮人庫人ゆ見

めくちゆゆを。代出ゆ次の巻の初。海路の。ゆ椰

子再載ゆ。柳子の木の形ハ。美鬱山の景に画ゆ。

椶櫚の樹のわき枝みゆ。

紅毛雜話卷之二